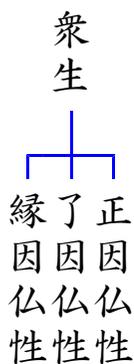


# 八宗違目抄

文永九年二月十八日

五一歳

記の九に云はく「若し其れ未だ開せざれば法報は迹に非ず、若し顕本し已はれば本迹各三なり」と。文句の九に云はく「仏三世に於て等しく三身有り、諸教の中に於て之を秘して伝へず」と。

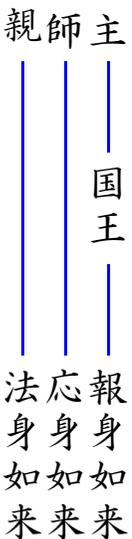


衆生の仏性

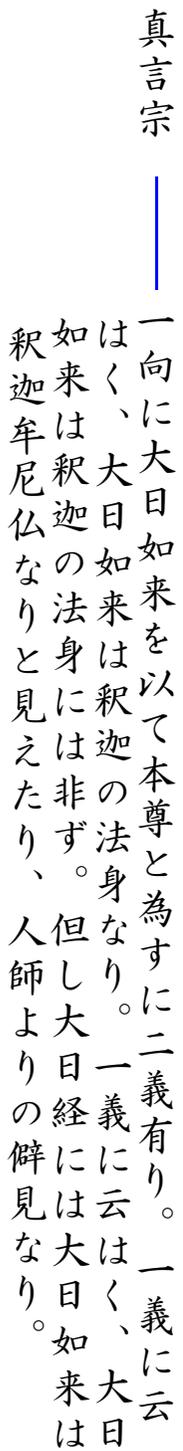
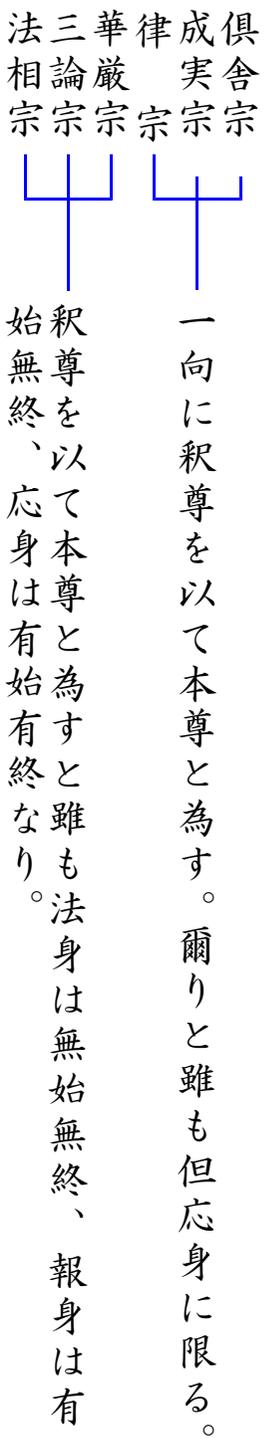
小乗経には仏性の有無を論ぜず  
華嚴・方等・般若・大日経等には衆生本より正因仏性有つて了因・縁因無し  
法華経には本より三因仏性有り

文句の十に云はく「正因仏性は法身の性なり」と。本當に通亘す。縁了仏性は種子本有にして今に適むるに非ざるなり」と。

法華経第二に云はく「今此の三界は皆是我が有なり」  
主・国王・世尊なり。  
「其の中の衆生は悉く是吾が子なり」  
親父なり。  
「而も今此の処は諸の患難多し。唯我一人のみ能く救護を為す」  
導師。  
寿量品に云はく「我も亦これ世の父」文。



五百問論に云はく「若し父の寿の遠きを知らざれば復父統の邦に迷はん。徒に才能と謂ふとも全く人の子に非ず」と。又云はく「但恐らくは才一國に当たるとも父母の年を識らざらんや」と。  
古今仏道論衡 道宣の作に云はく「三皇已前は未だ文字有らず。○但其母を識つて其の父を識らず。禽獸 鳥等なり に同じ」等云云 慧遠法師 周の武帝を詰る語なり。



浄土宗 一向に阿弥陀如来を以て本尊と為す。



は、即ち諸部の小乗三蔵を撰す。蘊の阿頼耶を觀じて自心の本不生を覺ると説くが如きは、即ち諸經の八識・三性・無性の義を撰す。極無自性心と十縁生の中の句を説くが如きは、即ち華嚴・般若の種々の不思議の境界を撰して皆其の中に入る。如実知自心を一切種智と名づくと言くが如きは、即ち仏性涅槃經なり。一乗法華經なり。如来秘藏大日經なり。皆其の中に入る。種々の聖言に於て其の精要を統べざることを無し」と。毘盧遮那經の疏に傳教・弘法之を見る。第七の下に云はく「天台の誦經は是円頓の數息なり」と謂ふ是此の意なり。

大宋の高僧伝卷の第二十七の含光の伝に云はく「代宗、光を重んずること如し、勅委して五台山に往いて功徳を修せしむ。時に天台の宗学湛然、妙樂、天台第六の師なり。禅觀を解了して深く智者。天台なり。の膏腴を得たりと。嘗て江淮の僧四十余人と清涼の境界に入る。湛然、光と相見えて西域伝法の事を問ふ。光の云はく、一国の僧空宗を体解する有り」と。問うて知者の教法に及ぶ。梵僧云はく、曾て聞く、此の教邪正を定め偏円を曉り、止觀を明かして功第一と推す。再三光に囑す。或は因縁あつて重ねて至らば、為に唐を翻じて梵と為して附し來たれ。某願はくは受持せんと屢々手を握つて囑す。詳らかにするに其の南印土には多く竜樹の宗見を行ずる故に此の流布を願ふこと有るなり」と。菩提心義の三に云はく「一行和上は元是天台一行三昧の禅師なり能く天台円滿の宗趣を得たり、故に凡そ説く所の文言義理、動もすれば天台に合す。不空三蔵の門人含光、天竺に歸るの日、天竺の僧問はく、傳へ聞く、彼の国に天台の教有り」と。理致須ゆべくば、翻譯して此の方を將來せんや云云、此の三蔵の旨も亦天台に合す。今或阿闍梨の云はく、真言を学せんと欲せば、先づ共に天台を学せよと。而して門人皆瞋る」云云。

問うて云はく、華嚴經に一念三千を明かすや。答えて云はく「心仏及衆生」等云云。止觀の一に云はく「此の一念の心は、縦ならず横ならず不可思議なり。但己のみ爾るに非ず、仏及び衆生も亦復是くの如し。華嚴に云はく、心と仏と及び衆生とは是の三差別無しと。当に知るべし己心に一切の法を具すること、華嚴に初住の心を歡じて云はく、華嚴の下は引いて理の齊しきことを証す。故に然り。心と仏と及び衆生とは是の三差別無し。諸仏は悉く一切は心に從つて轉ずと了知したまへり。若し能く是くの如く解すれば、彼の人事を作すこと自在にまつる。身亦是心に非ず、心も亦是身に非ず、一切の仏事を作すこと自在にして未曾有なり。若し人、三世一切の仏を知らんと欲せば、忘に是くの如き觀を作すべし。心、諸の如来を造すと。若し今家の諸の円文の意無くんば、彼の經の偈の旨、理として実に消し難からん」と。

小乗・四阿含經

心生の六界 心具の六界を明かさず。

大乘

通教 心生の六界 亦心具を明かさず。

別教

心生の十界 心具の十界を明かさず。

思議の十界

爾前・華嚴等の円

円教

不思議の十界互具。

法華の円

止の五に云はく「華嚴に云はく、心は工みなる画師の種々の五陰を造るが如く、一切世間の中に心より造らざること莫しと。種々の五陰とは前の十法界の五陰の如きなり」と。又云はく「又十種の五陰、一々に各十法を具す。謂はく、如是相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等なり」文。又云はく「夫一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば、百法界には即ち三千種の世間を具す。此の三千、一念の心に在り」文。弘の五に云はく「故に大師、覚意三昧・観心食法及び誦經法・小止観等の諸の心觀の文に、但自他等の觀を以て三仮を推せり、並びに未だ一念三千具足を云はず。乃至觀心論の中に、亦只三十六の問ひを以て四心を責むれども、亦一念三千に渉らず。唯四念処の中に、並びに觀心の十界を云ふのみ。故に止觀に正しく觀法を明かすに至つて、並びに三千を以て指南と為せり。乃ち是終窮究竟の極說なり。故に序の中に、説己心中所行法門と云ふ。良に以有るなり。請ふ、尋ね読み安忍無著なり。意円かち境の眞偽を簡び、中は則ち正助相添ひ、後は則ち安忍無著なり。意円か法巧みに該括周備して初心に規矩たり。將に行者を送して彼の薩雲に到らしむ。積劫の懃求したまへる所、道場の妙悟したまへる所、身子の三たび請する所、法譬の三たび説きたまふ所、正しく茲に在るに由るか」と。弘の五に云はく「四教の一十六門乃至八教の一期の始終に遍せり。今皆開顯して束ねて一乘に入れ、遍く諸經を括りて一實に備ふ。若し当分を者、尚偏教の教主の知る所に非ず。況んや復世間暗証の者をや。蓋し如来の下は称歎なり。十法は既に是法華の所乘なり、是の故に還つて法華の文を用ひて歎ず。迹の説に約せば、即ち大通智勝仏の時を指して法華の文を用ひて寂滅道場を以て妙悟と為す。若し本門に約せば、我本行菩薩道の時を指して以て積劫と為し、本成仏の時を以て妙悟と為す。本迹二門只是此の十法を求め、悟るなり。身子等とは、寂道にして説かんと欲するに物の機未だ宜しからず、其の苦に墮せん事を恐れて、更に方便を施す。四十余年種々に調熟し、法華の会に至つて初めて略して権を開するに、動執生疑して慇懃に三請す。五千起ち去つて方に枝葉無し。四一を点示して五仏の章を演べ、上根の人に被るを名づけて法説と為し、中根は未だ解せざれば猶譬喩をひ、下根の人に被るを名づけて法待つ。今の文の憑る所、意此に在り、惑者は未だ見ず。尚華嚴を指し、唯華嚴円頓の名を知つて而して彼の部の兼帶の説に味し。全く法華絶待の意を失ひて妙教独蹠の能を貶挫す。迹本の二文を驗べ五時の説を検ふれば円極謬らず、何ぞ須く疑を致すべけん。是の故に結して、正しく茲に在るか」と。又云はく「初めに華嚴を引くことを者、重ねて初めに引いて境相を示す文を牒す。彼の經第十八の云ふは即ち是心具なり、重ねて初めに引いて境相を示す文をす。彼の經第十八の云ふは即ち是心具なり、故に造の文を引いて以て心具を証する。画師の種々の五陰を造るが如く、一切世界の中に法として造らざること無し。心の如く、仏も亦爾なり、仏の如く衆生も然なり、心と仏と及び衆生とは三差別無し。若し人三世の一切の仏を知らんと欲せば、如何ぞ偈の心造一切三無差別を消せん」文。

諸宗の是非之を以て之を糾明すべきなり。恐々謹言。